

# 耳環は時間をあらわすか

－京田辺市松井横穴群での検討－

加藤 雅士

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



# 耳環は時間をあらわすか

## －京田辺市松井横穴群での検討－

加藤 雅士

### 1. はじめに

かつて筆者は京田辺市に所在する松井横穴群の発掘調査に携わる機会に恵まれた。<sup>(注1)</sup>丘陵斜面や谷地形の両側に70基もの横穴が並ぶ姿は壮観であり、現地作業中には一般／業界人に関わらず、多くの方に現地を実際に見て頂くように心掛けた。その中で考古学にとどまらず各分野の研究者から、多くの指導や助言を賜った。調査や報告に充分反映できたかは心許ないが、大変有難いものであった。

また同時に多くの宿題も頂いた。例えば、ある行政関係者からは以下のような課題が出された。京田辺市から八幡市にかけての約1.5km範囲には松井横穴群、女谷・荒坂横穴群、美濃山横穴群、狐谷横穴群が集中している。発掘調査の成果を基にこの範囲内に存在が想定される横穴数を復原すると、その数は合計600～700基となる。この復原が正しければ横穴群としてはもちろん群集墳としても史跡クラスの数量である。文化財保護に資するため、これら複数の遺跡群を一体的に表す名称を考えるよう言われた。これを受けて、松井横穴群の報告書では「有智・大住横穴群」の名称を提唱した。<sup>(注2)</sup>

本稿の表題は、大学関係者からの宿題である。曰く、耳環は土器よりも細かく時間の推移を反映しているので十二分に検討するようにとのことであった。松井横穴群の整理作業の際、出土した耳環のサイズについて一定の検討を進めていた。だが報告書に纏めるに至っては、種々の理由から検討結果を明らかにできていなかった。何らか形での公表を考えていたが、かなりの時間がたってしまった。抜けない棘のような感覚を持ちながらも、全て筆者の怠慢である。ここに忘れていた宿題を提出することにする。

### 2. 研究史

表題の問いかけについて、実はすでに、耳環の大きさが時期を表すとの評価が定まっている。松本百合子氏(松本1991)は奈良県の事例を基に、純金・銀製耳環(5世紀末から6世紀初頭)→銅芯金・銀張耳環(6世紀前半から6世紀後半に多い)→中空耳環(6世紀末から7世紀前半に限定される)<sup>(注3)</sup>とする流れを提示した。また銅芯金・銀張耳環の断面形は円

形と楕円形のものがあり、断面形楕円形のは6世紀前半に遡らないとした。この研究は耳環の諸属性に時間差を見出し、編年可能であることを示した点が大きく評価されている。一方、松本氏が耳環の平面サイズについて細かく触れていない点には注意が必要であろう。変遷図に示された「銅芯金・銀張耳環」を見ると、サイズの大きいものと小さなものが混在している。すなわち、時間の流れで線形的にサイズが変化するには想定されていないと確認できる。後述する東山古墳群の検討(野口1999)では、「銅芯金・銀張耳環」の平面形サイズについて、松本氏が大型太環(6世紀中葉)から小型(7世紀前半)に変化すると指摘したとしているが、これは正確な学史理解ではなかろう。なお中空耳環については、松本氏に先立って小池寛氏が集成的検討をおこなっており、副葬品として最も多い時期は6世紀後半で7世紀代になると激減すると結論づけている(小池1987)。両者の年代観には若干の齟齬が生じているようであるが、最近の研究(岩橋2022)では中空耳環の初源は6世紀後半頃(TK43)に求められているようである<sup>(註4)</sup>。このような編年的特徴を基にして、個別遺跡で耳環を分析した例として、管見ではあるが次のようなものが挙げられる。

細川康晴氏(細川1994)は、京都府の丹後地域の古墳と横穴を対象にして、伴う土器の時期から耳環について以下の段階を設定している<sup>(註5)</sup>。Ⅰ段階：「TK43～TK209の古い段階」。平面形の長軸(横幅)は30mm前後。断面形は正円形。Ⅱ段階：TK209前後に対応。長軸25mm前後の中型。断面形は高さのわりに厚みが薄い。Ⅲ段階：「飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式」。長軸20mm前後で小型。上記の3段階を設定した上で、「飛鳥Ⅲ型式の新しい段階」には金環の副葬は終息するとしている。

京都府立大学が携わった兵庫県多可郡中町の東山古墳群(野口1999、菱田2001)では、平面形サイズが比較的大型で断面円形のもの、小型で断面楕円形のものがあり、出土した古墳の編年から時期差として捉えられるとしている<sup>(註6)</sup>。また素材についても、前者が銀張り、後者が金張り(鍍金)が多いことを指摘している。こうした傾向を材料にして、古墳群古墳の新旧関係や、同一古墳内での時期差を検討している。

このようにして見てゆくと、当初、松本氏により耳環の編年的特徴として耳環の断面形の変化(円形から楕円形へ)が指摘された。その後、断面形の変化と平面サイズの変化に相関性が見いだされ、平面的に大きいものから小さいものへと認識されるようになったことが確認できた。

### 3. 松井横穴群の概要

松井横穴群の発掘調査では70基の横穴を検出した(図1)。このうち調査区外へ展開する2基は完全に保存されるので平面的な検出にとどめ、残り68基について遺構掘削をおこ



図1 松井横穴群遺構配置図

なった。横穴は、丘陵の東西両側面にあたる4・12トレンチと、丘陵に対して北から入る谷地形の西と東の斜面にある1・2トレンチで検出した。次に横穴の時期である。横穴の時期は出土した土器(ほとんどは須恵器)で決定している。準拠したのは田辺編年(田辺1966・1981)であるが、田辺編年で言及のない杯以外の器種の変化等については他の文献を参照した。この点を考慮して、報告書内では松井I期～V期を設定して記述を行ったが、本稿では分かりやすさを優先して、田辺編年と飛鳥地域の土器編年の名称を使用する。

玄室から出土した土器の時期は古くはTK43で、新しいものは飛鳥Ⅳ～平城Ⅱの範囲で捉えられるものであるが、主体となるものはTK43～飛鳥Ⅱである。各トレンチに共通する全体の傾向として、平野部に近い北側の横穴が古く、南側に向かって時期が新しくなっている。この点は、報告書(347頁・第313図)で示した須恵器杯Hの法量と調整の傾向を見ても明らかである。横穴番号は、各トレンチで基本的に南から順番に数字を割り振っている。よって同一トレンチ内においては、横穴番号の数字が若い方が相対的に時期が新しい場合が多い。この点を念頭に置いていただくと、より理解が進むのではないかと思われる。本稿で扱う耳環が出土した横穴は23基であり、ここから出土した耳環の合計は49点である。内訳は中空耳環が3点で、他は科学分析を実施していないものの銅芯を持つものと判断している。なお肉眼と実体顕微鏡での観察の結果、不明を除いて全て金環と報告しているが、今回、改めて観察したところ金環／銀環の判断に悩ましいものが複数存在するのが実際のところであった。自身、反省するとともに、今後留意されたい。耳環の年代については、今回は、玄室から出土した土器の年代をそのまま当てはめる。言うまでもなく、この方法には注意が必要である。遺体を納めた後にも玄室内へ人や物の出入りがあり、遺体や副葬品も動かされているからである。土器枕の傍に2点セットで検出した耳環に限定する等の方法も考えられるが、検討対象数を増やす意味でも前述の方針をとる。

さて松井横穴群で耳環が出土した横穴の年代を見ると、ほとんどがTK43～飛鳥Ⅰの範囲に収まっている。飛鳥Ⅱ以降の土器が出土する横穴は15号横穴のみであり、先述の細川氏が指摘した丹後地域と状況が異なるようである。つまり、耳環の副葬の終わる時期が地域によって異なる可能性が生じている。今後、検討が必要な課題であろう。

#### 4. 耳環の偏平率と時期

先に研究史で見たとおり、耳環の断面形については円形から楕円形へと変化すると考えられている。その一方で、具体的な数値に基づいた詳細な検討は進んでいないように見受けられる。そこで、松井横穴群の調査で出土した耳環について、断面高と断面幅を散布図で示した(図2)。加えて散布図には、自動車タイヤ等なじみのある偏平率を補助線とし

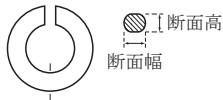
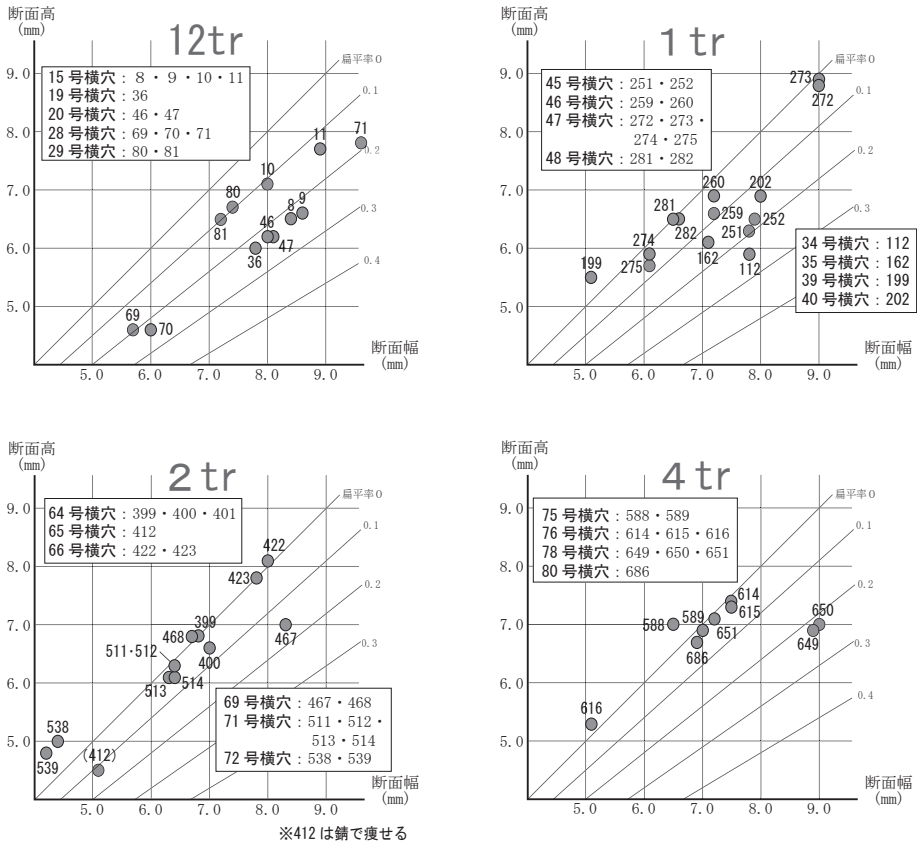
表1 出土耳環と横穴の年代

| 報告<br>番号 | 出土横穴  | 横穴出土<br>遺物の年代 | 耳環        |            |             |             |
|----------|-------|---------------|-----------|------------|-------------|-------------|
|          |       |               | 幅<br>(mm) | 天地<br>(mm) | 断面高<br>(mm) | 断面幅<br>(mm) |
| 8        | 15号横穴 | 飛鳥Ⅲ以降         | 29.1      | 27.7       | 6.5         | 8.4         |
| 9        |       |               | 29.8      | 27.7       | 6.6         | 8.6         |
| 10       |       |               | (28.5)    | (25.5)     | 7.1         | 8           |
| 11       |       |               | 31.0      | 28.0       | 7.7         | 8.9         |
| 36       | 19号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 27.0      | 24.9       | 6           | 7.8         |
| 46       | 20号横穴 | TK209         | 29.2      | 26.5       | 6.2         | 8           |
| 47       |       |               | 29.0      | 26.7       | 6.2         | 8.1         |
| 69       | 28号横穴 | TK209         | 23.0      | 21.0       | 4.6         | 5.7         |
| 70       |       |               | 22.7      | 20.5       | 4.6         | 6           |
| 71       |       |               | (25.0)    | 28.0       | 7.8         | 9.6         |
| 80       | 29号横穴 | TK209         | 30.0      | 27.0       | 6.7         | 7.4         |
| 81       |       |               | 32.0      | 27.0       | 6.5         | 7.2         |
| 112      | 34号横穴 | 飛鳥Ⅰ           | 25.5      | 23.6       | 5.9         | 7.8         |
| 162      | 35号横穴 | 飛鳥Ⅰ           | 29.2      | 26.0       | 6.1         | 7.2         |
| 199      | 39号横穴 | 飛鳥Ⅰ           | 26.0      | 23.6       | 5.5         | 5.1         |
| 202      | 40号横穴 | TK43～飛鳥Ⅰ      | 31.0      | 27.9       | 6.9         | 8.1         |
| 251      | 45号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 28.3      | 26.6       | 6.3         | 7.8         |
| 252      |       |               | 28.3      | 26.3       | 6.5         | 7.9         |
| 259      | 46号横穴 | TK43～TK209    | 32.0      | 28.2       | 7.6         | 7.2         |
| 260      |       |               | 31.9      | 28.1       | 6.9         | 7.2         |
| 272      | 47号横穴 | TK209         | 35.6      | 31.7       | 8.8         | 9           |
| 273      |       |               | 35.4      | 32.1       | 8.9         | 9           |
| 274      |       |               | 27.0      | 24.2       | 5.9         | 6.1         |
| 275      |       |               | 26.6      | 24.1       | 5.7         | 6.1         |
| 281      | 48号横穴 | TK209         | 28.6      | 26.1       | 6.5         | 6.5         |
| 282      |       |               | 28.5      | 26.3       | 6.5         | 6.6         |
| 399      | 64号横穴 | TK209         | 31.0      | 27.3       | 6.7         | 6.8         |
| 400      |       |               | 30.3      | 27.0       | 6.6         | 7           |
| 401      |       |               | (27.6)    | (26.0)     | -           | -           |
| 412      | 65号横穴 | 飛鳥Ⅰ           | 27.7      | 24.5       | 4.5         | 5.1         |
| 422      | 66号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 32.7      | 3.0        | 8           | 8.1         |
| 423      |       |               | 33.0      | 3.0        | 7.8         | 7.8         |
| 467      | 69号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 31.7      | 27.5       | 7           | 8.3         |
| 468      |       |               | 31.8      | 28.0       | 6.8         | 6.7         |
| 511      | 71号横穴 | TK43～TK209    | 30.9      | 28.0       | 6.3         | 6.4         |
| 512      |       |               | 30.5      | 28.0       | 6.3         | 6.4         |
| 513      |       |               | 28.0      | 25.7       | 6.1         | 6.3         |
| 514      |       |               | 28.1      | 25.4       | 6.1         | 6.4         |
| 538      | 72号横穴 | TK43～TK209    | 27.0      | 25.0       | 5           | 4.4         |
| 539      |       |               | 27.8      | 24.7       | 4.8         | 4.2         |
| 588      | 75号横穴 | TK209         | 31.7      | 29.1       | 7           | 6.5         |
| 589      |       |               | 31.2      | 28.0       | 6.9         | 7           |
| 614      | 76号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 33.0      | 29.0       | 7.4         | 7.5         |
| 615      |       |               | 33.5      | 29.0       | 7.3         | 7.5         |
| 616      |       |               | 29.0      | 26.0       | 5.3         | 5.1         |
| 649      | 78号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 30.0      | 27.5       | 6.9         | 8.9         |
| 650      |       |               | 31.0      | 27.5       | 7           | 9           |
| 651      |       |               | 29.5      | 27.0       | 7.1         | 7.2         |
| 686      | 80号横穴 | TK209～飛鳥Ⅰ     | 30.5      | 28.0       | 6.7         | 6.9         |

て書き入れた。図中の番号は報告書内の遺物番号である。確認しておく、散布図の左上にドットがある耳環は断面が円形であり、右下に向かうに連れて偏平の割合が高くなる。ちなみに偏平率( $f$ )は、 $(1 - \text{断面高} / \text{断面幅})$ で求められる。

耳環断面は全体として概ね偏平率0～0.3の間に収まっている。だが調査区ごとに傾向が異なっており、2・4トレンチでは、偏平率0.1以下の断面が正円に近い耳環が多い。1トレンチでも偏平率0.1以下のものが多いが、同時に偏平率0.1～0.3のものも多く含んでいる。これらに対して12トレンチでは偏平率0.1以下のものが極めて少なく、ほとんどが偏平率0.1～0.3の範囲に収まる。すなわち、より古い要素と考えられている耳環が少ないことになる。本横穴群で最も古い遺物の時期はTK43であり、1・2・4トレンチの横穴からはTK43～TK209の範疇で捉えられる須恵器が出土している。これに対し、12トレンチでは当該時期の須恵器の出土が無く、他の調査区の横穴よりも築造開始が若干新しいと言える。この点は、耳環の偏平割合が時間の新旧を表すとする学史的解釈と調和的である。

より具体的な時期と偏平率の関係を見てゆこう。各横穴から出土している土器には年代幅があるため、先にも述べた通り、土器の様相が最も古い横穴はTK43～TK209の範囲で捉えられるものである。これに該当するのは46号横穴(耳環の報告番号(以下同じ)259・260)、71号横穴(511～514)、72号横穴(538・539)である。これらの偏平率をみるといずれも0.1以下の円形のものであり、偏平率が低いものは古い傾向が伺える。次にこれより新しい時期のTK209に限定されるものを抽出すると、20号横穴(46・47)、28号横穴(69・70・71)、29号横穴(80・81)、47号横穴(272～275)、48号横穴(281・282)、64号横穴(388・400。401は計測不能)、75号横穴(588・589)となる。これらの横穴から出土した耳環の断面をみると、偏平率が0.1以下のものが多い一方、偏平率0.2前後のものも少なからず含まれていることが分かる。上記の両者(TK43～TK209の範囲で捉えられるものとTK209に限定されるもの)を比べた時、時期が新しいTK209の方が全体として耳環の偏平割合が強まる傾向が伺える。その一方、図中の偏平率0.1以下の場所において両者が重複しているため、個別一点の偏平率を基にして時期を判別することはできない。これは、飛鳥Ⅰのみ出土する横穴を抽出した場合でも同様である。該当する横穴は34号横穴(112)、35号横穴(162)、39号横穴(199)であり、偏平率が0.3を超えるもの(199)が含まれる。時期が新しくなるにつれて偏平率が高くなると理解できるが、同時に偏平率が0以下のもの(199)も含まれており、やはり偏平割合のみでの時期判別は不可能である。



$$\text{扁平率} = 1 - \text{断面高} \div \text{断面幅}$$

図2 耳環の扁平率

## 5. 耳環のサイズ

ここでは耳環の平面的大きさについて検討する。耳環の開き部を上にして、天地と幅を散布図で示した(図3)。ここでも、前章で挙げた例を基にTK43~TK209と飛鳥Iに限定される例を比較すると、全体の傾向としては古いものが天地・幅とも大きく、新しいものが小さい傾向が伺える。TK43~TK209については、3mm程度を振れ幅と考えれば、丹後地域で細川氏がI段階の条件とした「30mm前後」とも合致する。その一方、TK43~TK209と飛鳥Iの両者では、図上の分布で重複する部分があり、扁平率の場合と同じく耳環の大きさを基にして個別の時期を求めるのは難しい。この困難さは、TK209に限定される例を含めると増すことになる。当該時期の土器が伴う横穴から出土した耳環の幅

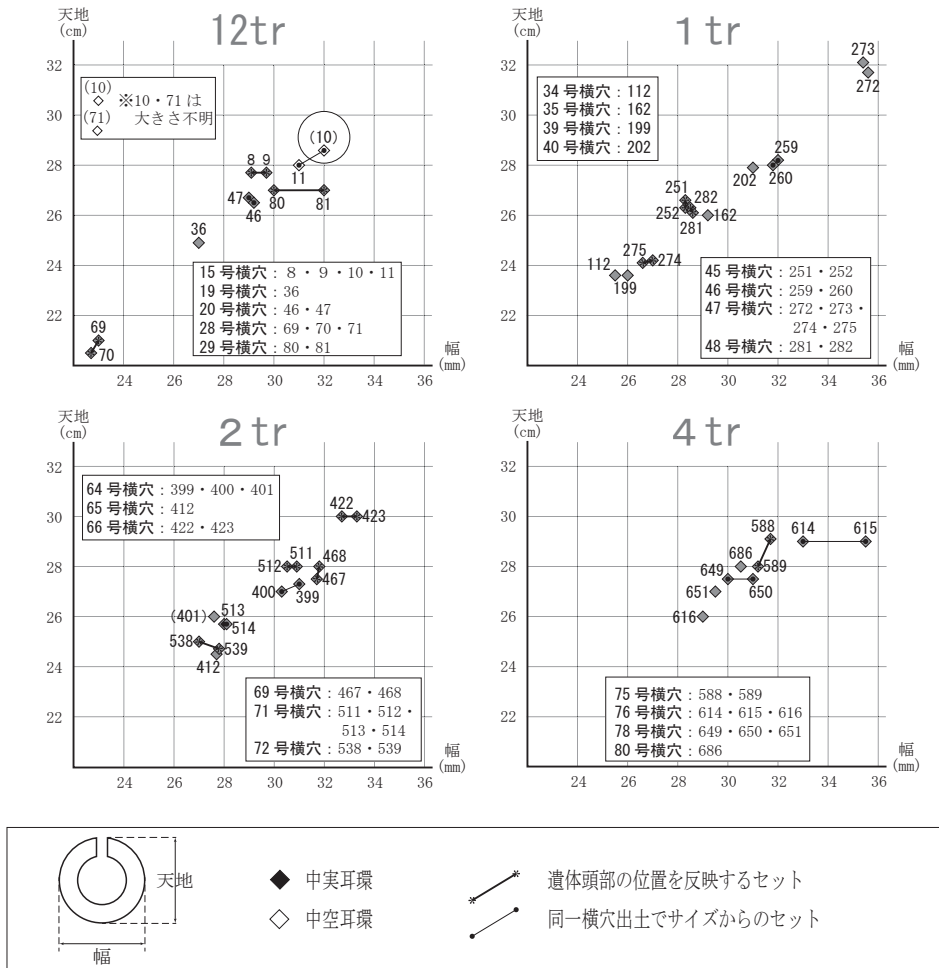


図3 耳環の大きさ

は、30mm前後を中心としながらも20mm弱のもの(69・70)から、35mm超のもの(272・273)まで図上の分布が幅広いからである。

研究史では、まず耳環の偏平率の変化が見いだされ、次いで偏平率と平面サイズの相関が見いだされることで、大きさの変化があるとされた。この点についても検討する。図4の左半には耳環の幅を小さいものから順に並べ、同じく図の右半には偏平率の大きいものから順に並べている。各耳環の計測値が図の左右に並んでいる形であり、中央の破線で結んで個別の耳環であることを示した。耳環の偏平率と平面サイズが相関するのであれば、図中央の破線は水平基調になるはずである。確かに、幅が小さいものと偏平率の大きいものの相関が(図下方の3点)少数認められるものの、全体としては破線どうしが激しく交差

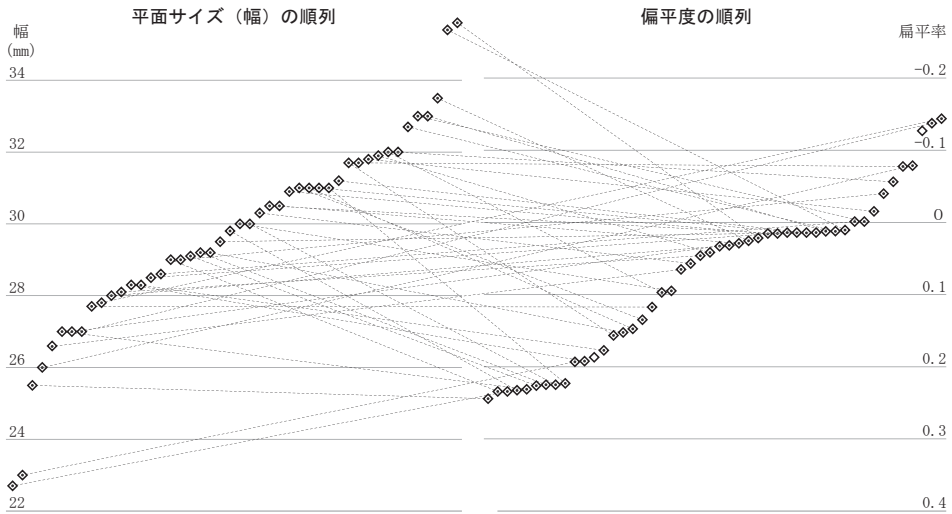


図4 大きさと偏平率の相関

している。つまり、“平面形の大きいもの＝断面円形”でかつ“平面形の小さいもの＝断面偏平”という図式は少なくとも松井横穴群ではあてはまらず、耳環の偏平率と平面サイズに相関関係があるとは言えない。

## 6. 小結

松井横穴群から出土した耳環断面の偏平率について、全体としてみると古いものは円形であり、新しいものが偏平になる傾向が見出せる。これはあくまで全体の傾向であり、個別では当てはまらない場合もある。よって、偏平率で耳環の個別時期を求めるのは困難である。平面サイズについても大きいものが古く、小さいものが新しいとする若干の傾向は全体としては伺えるものの、個別の耳環について大きさから時期を導きだすことはやはり不可能である。また、偏平率と平面サイズについても相関関係を見出すのは難しい。

結論として松本氏より後の先行研究の成果は、松井横穴群には適用しにくいと言える。繰り返しになるがこの点については先にも述べたとおり、出土した土器が必ずしも耳環の時期を正確に反映していない可能性を考慮に入れておかねばならない。また玄室内では土器だけではなく、次章にみるように耳環も動かされている点にも注意が必要であろう。

## 7. 検討結果の活用—終わりに代えて

耳環が遺体の左右の耳に1点ずつ装着されていたと仮定すると、1体の遺体に対して、耳環が2点=1セットが伴うことになる。こうした復原に対しては、有井宏子氏(有井

1995)が警鐘を鳴らしているもの<sup>(注9)</sup>、松井横穴群の調査では頭骨(45・69号横穴)や土器枕(66号横穴)の両側から耳環が出土した例がある。よって一見すると素朴な考えではあるものの、極めて有効な復原であると筆者は考えている。また出土耳環全点を観察してみると、同一横穴から出土する2点は、平面的大きさ・厚さ・偏平率・開き部の距離・色調・雰囲気がかなり似通っており、製作技法も同じであろうと考えられる。つまり遺物のライフサイクルとしても、当初から2点を1セットとして製作され、最終段階である横穴内でもやはり2点=1セットで扱われたものとするのが当然の解釈であろう。

その一方、玄室から出土する耳環の実際の数には2点=1セットだけではなく、奇数(1点や3点)や2セット(4点)の場合も多い。本稿では、偏平率やサイズから耳環個々の具体的な時期を求めるのは難しいと結論づけたが、一方で全体としては耳環の断面の形状は円形から偏平へ、平面サイズが大きいものから小さなものへとする先行研究の理解は肯定している。すなわち相対的な先後関係を見出すことは可能であり、この視点は2点=1セット以外の出土例を検討する際には有用であろう。

例えば15号横穴では、玄室の左側<sup>(注10)</sup>で並んで2点の耳環(8・9)が検出されている(図5)。両者の距離は0.15mであり、報告書内では遺体に装着していた位置が反映されているものと判断している。玄室内では、これのほかに離れた位置から2点の耳環(10・11)が出土しているが、大きさ・色調や雰囲気からすれば10・11の耳環が本来はセットであろうことはほぼ間違いない。その上で、8・9と10・11の耳環を比較すると、平面サイズはほぼ同じであるが、8・9の方が断面の偏平率が大きい。つまり相対的には10・11が古く、8・9が新しい可能性が生じてくる。これを玄室への埋葬と絡めて理解すると、先に10・11の耳環に関わる遺体が納められ、その後、8・9の耳環を装着した遺体が納められる。後者は玄室左側の位置で、なおかつ玄室主軸に並行しているものに復原できる。10・11の耳環は後に動かされたものと考えられるが、タイミングとしては8・9を装着した遺体が納められる際、ないしその前が候補となるであろう。

同様の検討は28・47・71号横穴でも可能である。28号横穴では、セットとみられる耳環(69・70)の他、中空耳環(71)が1点出土している。69・70と71の耳環を比較すると偏平率はほぼ同じである。一方、平面サイズでは69・70の方がかなり小さく、こちらのセットが新しい埋葬に伴うものであると仮定することができる。47・71号横穴では2セットの耳環が出土している。47号横穴では玄室の右側(272・273)と左側(274・275)で耳環が出土している。71号横穴では玄室の右側(513・514)と左側(511・512)でそれぞれセットとなる耳環が出土している。それぞれを比較すると偏平率はほぼ同じであるが、47号横穴では272・273の方が、71号横穴では511・512の方がそれぞれ平面サイズが大きく、古い埋葬

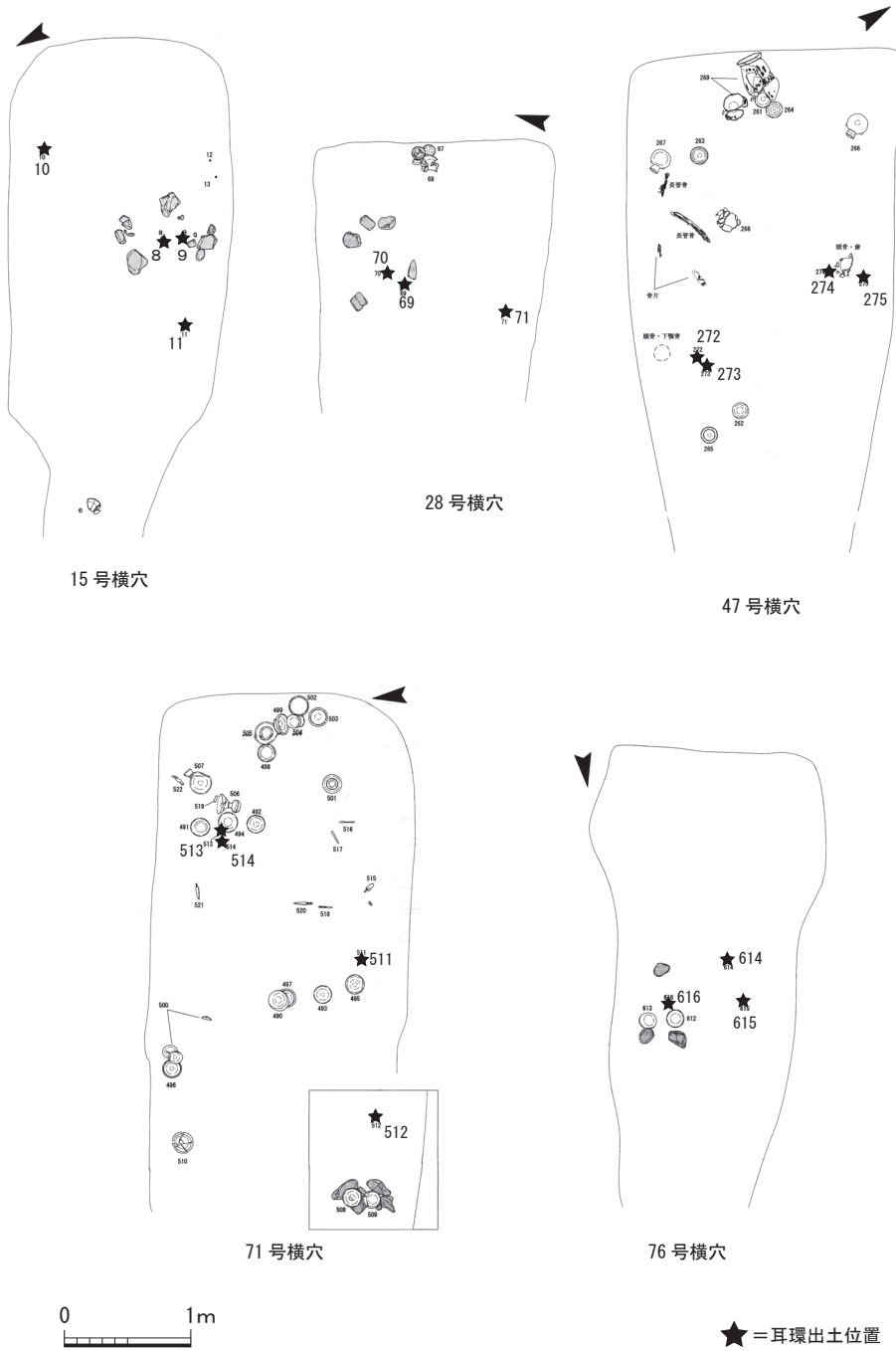


図5 耳環の出土状況



に見たとおり、横穴内はもとより横穴外へも埋葬後に耳環が動かされていることが、その原因の一つとして挙げることができる。

今回は、耳環の大きさや扁平率から個別具体的な時期を求めることができないかと始めた検討であるが、それは叶わなかった。しかし本稿の特長は、具体的な計測値を材料にし、かつ、まとまった数量を扱った点にある。今後、他遺跡例でも同様の分析をおこない、批判的検討がなされることを望みたい。

(かとう・まさし＝当調査研究センター調査課主査)

現地調査中や整理作業の際には多くの方々から有益なご指導をいただき、改めて感謝申し上げます。なかでも当センター理事でもあります菱田哲郎先生におかれましては、宿題の提出が遅れ、かつ、このような粗削りなものとなってしまった点、申し訳ありませんでした。

注1 (公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター2018「松井横穴群第1～4次」『京都府遺跡調査報告集』第171集

注2 約1.5kmの範囲内に存在する多数の横穴群を一連で捉えるべきとする指摘は平良泰久氏が最初に示したものである(平良1975)。平良氏は「美濃山・松井横穴群」としているが、この名称に係る問題点については松井横穴群の報告書内で指摘している。

平良泰久1975「南山城の後期古墳と氏族」『京都考古』第14号 京都考古刊行会

注3 松本百合子1991「2副葬品の種類と編年 5装身具 B耳飾」『古墳時代の研究』第8巻(古墳Ⅱ 副葬品)雄山閣

注4 小池 寛1987「中空耳環について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集(創立五周年記念誌)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。岩橋孝典2022「再考・中空耳環－鳥根県内出土例を理解するための一試案」『古代文化研究』No.30 鳥根県古代文化センター

注5 細川康晴1994「砥石場西1号墳」『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』京都府教育委員会

注6 野口成美1999「東山古墳群出土耳環の特徴」『東山古墳群Ⅰ』兵庫県多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室。菱田哲郎2001「2 東山古墳群の形成過程と造墓原理 a 12号墳出土土器と耳環の位置づけ」『東山古墳群Ⅱ』兵庫県多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

注7 田辺昭三1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園研究編集第10号 平安学園考古学クラブ。田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

注8 断面径については、耳環の中央と端部のどちらを計測するかで数値が異なる。今回は東山古墳群の検討に従って、耳環の中央部を対象にして改めてデジタルノギスで計測した。平面的大きさについては報告書掲載の数値を利用した。

注9 有井宏子1995「耳環の出土状況」『摂河泉文化資料』第44号 摂河泉文庫

注10 横穴の“左右”について、松井横穴群の報告書では墓道側から玄室奥壁側を見たものとして記述した。これは筆者の認識不足であり、本来は奥壁側から墓道側を見たものにすべきであった。本稿では後者の方法で表現する。

